

<p>3月29日 (日)</p> <p>歴代誌上 9章</p>	<p>「コラの家の者が、幕屋の入り口を守る者としての職務に就いた。彼らの先祖も主の宿営の入り口を守っていた」(19節)。捕囚後、エルサレムに帰還したレビ人で「門衛」を職務とする人たちがいた。800年以上受け継がれた職務が捕囚期間中も継承され続けたことに驚かされる。目に見える神殿を失っても、彼らの主に対する信仰が失われることはなかった。</p>
<p>30日 (月)</p> <p>歴代誌上 10章</p>	<p>「サウルは、主に背いた罪のため、主の言葉を守らず、かえって口寄せに伺いを立てたために死んだ」(13節)。サムエルはサウルを次のように叱責した。「主が喜ばれるのは焼き尽くす献げ物だろうか。むしろ主の声に聞き従うことではないか」(サムエル記上 15:22)。私たちの場合、主を利用するのではなく、主の声に聞き従う喜びの献げ物になっているだろうか。</p>
<p>31日 (火)</p> <p>歴代誌上 11章</p>	<p>「わが神よ、わたしはこのようなことを決してすべきではありません。…彼らの命のかかった血を飲むことができますか」(19節)。ダビデが「ベツレヘムの井戸の水」を所望したばかりに三人の勇士が命がけで敵陣を突破して水を持ち帰った時の言葉。ダビデの良さは、過ちに気づいた時に主の前に立ち帰ることができる点。主から与えられる「気づき」を大切に。</p>
<p>4月1日 (水)</p> <p>歴代誌上 12章</p>	<p>「毎日のように、ダビデを助ける者が加わり、ついに神の陣営のような大きな陣営ができた」(23節)。ダビデがサウルを退けて王位に就くことができたのは、彼自身の力ではなく、主なる神がダビデを助ける勇士たちを遣わされたからだった。私たちは自分への「祝福」を勘違いしてはならない。あくまでも「神の働き」を担うために「祝福」をいただいていることを。</p>

<p>2日 (木)</p> <p>歴代誌上 13章</p>	<p>「三か月の間、神の箱はオベド・エドムの家族と共に、その家の中にあった。主はオベド・エドムの家の者とその財産のすべてを祝福された」(14節)。ダビデがエルサレムに運ぶことに失敗し、恐れ遠ざけた「神の箱」だったが、それを押し付けられたオベド・エドムの家を神は祝福された。ダビデが、自分の信仰には何が足りないのかを学ぶ三か月間とするために。</p>
<p>3日 (金)</p> <p>歴代誌上 14章</p>	<p>「ダビデは神の命じられたとおりに行動し…ペリシテ人の陣営を討ち滅ぼした」(16節)。ダビデは戦略家として知られ、若い時から多くの武勲を立ててきた。その秘密がここに記されている。私たちは自分に自信がつき始めると、途端に主に聴くことをやめてしまう。主なる神は私たちの都合よい道具ではない。主なる神に従うために私たちは召されているのだ。</p>
<p>4日 (土)</p> <p>歴代誌上 15章</p>	<p>「ダビデは、ダビデの町に宮殿を造り、神の箱のために場所を整え、天幕を張った」(1節)。かつて「神の箱」を運ぶことに失敗し、「神の箱」を恐れ遠ざけたダビデだったが、まず神の箱を安置するための宮殿と天幕を整え、次に「神の箱」を運ぶレビ人たちを整えた。神を礼拝するためには丁寧な準備が必要なのだ。そのような前準備を通して信仰は整えられる。</p>
<p>5日 (日)</p> <p>歴代誌上 16章</p>	<p>「恵み深い主に感謝せよ、慈しみはとこしえに」(34節)。ダビデはアサフとその兄弟たちに主に感謝をささげる務めを託した。賛美の歌は詩編として私たちに受け継がれている。主の恵みが日々の生活にあふれていることを心に留めて、主への賛美を口ずさみつつ、不安の多い時を共に過ごしていきましょう。主の慈しみがいつも私たちに注がれていることを覚えて</p>